

むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがいました。

ある日のこと、おじいさんは、庭を掃はいていて、豆をひとつぶ見つけました。

「この豆さん、ねずみにやろう」

おじいさんは、そういつて、豆をねずみのあなに落としました。

二日ほどたって、あなからねずみが出てきました。ねずみは、

「おじいさん、おじいさん、このあいだはごちそうさまでした。お礼がしたいので、いちどうちに来てください」といいました。おじいさんは、

「ねずみのあなになんか、どうしたら入っていけるんだい」とききました。すると、ねずみは、

「目をつむって、おれのしっぽにつかまってください」といいました。そこで、おじいさんが目をつむってねずみのしっぽにつかまると、ねずみは、

「おれが『よろしい』というまで、目を開けてはいけませんよ」といいました。

おじいさんがねずみのしっぽにつかまって、黙って目つむっていると、すうっとあなの中に入っていくって、ずるっとすべったと思ったら、「目を開けてよろしい」と、声がしました。

目を開けてみると、座敷のあるりっぱなお屋敷に着いていました。そこで、たくさんのおねずみたちが餅つきをしていました。ねずみたちは、

百になっても 二百になっても

ねこの声 聞きたくない

と歌いながら、一生懸命お餅をついていました。そして、あずき餅やらきなこ餅やら豆餅やら、いろいろ作ってじいさんにごちそうしてくれました。

「どうも、どうも、ごちそうさま」と、おじいさんがいうと、ねずみたちは、たくさんのお餅を重箱（はらいばこ）に詰めて、

「これは、おばあさんのお土産（みやげ）に持って帰ってください」といつて、おじいさんにくれました。そこへ、はじめのねずみが出てきて、

「おじいさん、おじいさん、目をつむっておれのしっぽにつかまってください」といいました。

おじいさんが目をつむってねずみのしっぽにつかまると、ずるっとすべって、あたりが明るくなって、気がつくのと、うちに着いていました。

おじいさんは、おばあさんに、

「これは、ねずみがくれたお土産だよ」といって、重箱を開け、ふたりで仲良くお餅を食べました。

それを、となりのおじいさんが、戸の節穴ふしあなからのぞいていました。

「ああ、そんなら、うちでもねずみのあなに豆を落としてやろう」

となりのおじいさんはうちに帰ると、豆をひとつぶ拾ったふりをして、ねずみのあなに押しこみました。

しばらくすると、ねずみが迎えにきました。

「おじいさん、おじいさん、このあいだはごちそうさまでした。お礼がしたいから、目をつむってしっぽにつかまってください」

となりのおじいさんが目をつむってしっぽにつかまると、やっぱりすうつとあなに入っっていつて、ずるっとすべったかと思うと、「目を開けてよろしい」と、声がしました。目を開けると、ねずみの屋敷に着いていました。そこでは、たくさんのねずみが餅つきをしていました。

百になっても 二百になっても

ねこの声 聞きたくない

となりのおじいさんは、

(ニャオーンていったら、きつとみんな逃げていくぞ。そしたら、お餅はみんなわしの物だ)と思いました。そこで、横を向いて、ニャオーンとねこのまねをしました。すると、ねずみたちは、

「わあ、ねこが来た。たいへんだ」ときけんで、みんな逃げて行きました。

そのとたん、あたりがまっくらになって、何も見えなくなりました。となりのおじいさんは、餅を持ってかえるどころか、とうとうあなから出られなくなったということです。

おしまい

村上郁 再話

資料『民話 稲川町編』しだゆみこ